



「あっ……んっ……ああ……っ……」

甘い嬌声がベッドの軋みと絡み合い、濃密な室内の空気を震わせる。  
切なげに高まっていくその声と、何より俺自身の体で感じる緊縮が、  
彼女の絶頂に近いことを知らせていた。

「俺も、そろそろかな……出すよ……」

吐息の合間にそう告げると、さらに激しく腰を打ち付け——そして、熱い迸りを彼女の内に放つ。  
余韻が収まるまでの時間でキスをかわし、やがて深い息をつきながら繋がりを解いた。

(もう少し持つかと思ってたんだけど、無理だったな。  
ほんと、すっかり魅力的な体になった……)

心の中で苦笑しながら仰向けになり、額にかいた汗を手の甲で拭う。

「海杜」

「……ん？ なに？」

呼ばれて隣を見ると、彼女も仰向けの状態で顔だけをこちらに向けていた。  
まっすぐ俺を見る眼差しは、まだわずかに情事の熱を残している。

「海杜は今までも数え切れないくらいの女の子を教育してきたのよね？」

何を話すのかと思えば、彼女はそう尋ねてきた。  
少し驚くが、顔には出さずに短く答える。

「うん、そうだよ」

もう何年にもなる。  
今となってはその人数を正確には把握していない。でも――

「……でも、数は覚えてなくても顔はみんな覚えてるよ。  
名前を言われたら、きっとすぐに顔を思い出せる」

「え……」

彼女の目が大きく見開かれた。  
その瞳にほんの少しだけ、柔らかな喜びの色が生まれる。

（本当はこんな話、するべきじゃないよな）

ボスに聞かれたら、余計な情を抱かせるなど叱られるところだ。  
ヴェロニカと教育係に体以上の繋がりなどいない。  
わかっているけれど……彼女の前でだと、時折自分を律しきれなくなる。

（でもきっと、彼女になら伝わるはずだ。俺の選んだ生き方……）

そして、俺が彼女に選んでほしいと願っている生き方。  
だから俺は、そのまま話を続けた。

「みんなその時の俺にとって、大切な……可愛いヴェロニカ候補生だったから。  
早く一人前にしてあげたいと思って、全力で指導してたしね」

この館に来るのは居場所をなくした者ばかりだ。  
騙され、売られ、追い詰められ、もはや一般社会に自分の住处などないと嘆いている。

でも、そうじゃない。

居場所も、救われる道も、まだまだ残っているから。

だから俺は彼女たちに指導を施し、救う。

(それこそが、俺の救いでもあるから……なんて言ったら、怒られるかもしれないけど)

この館に来るのは居場所をなくした者ばかりだ。

でも俺はここへ来て、自分が誰かを喜ばせられること、変えられることを初めて知った。

やっと見つけた場所……人に堂々と名乗れる職業かどうかなんて、どうでもいい。

「……私もいいヴェロニカになれるかな」

彼女がぼつりと呟く。

半信半疑の不安そうな表情は、やはり数年前の自分によく似ていると思った。

俺はふっと笑うと、ためらうことなくはっきりと答える。

「なれるよ。俺がしてみせる」

「この館は不幸の始まる場所じゃない。そんな場所には、俺が絶対にさせない」

「君は幸せになれるよ。大丈夫」

「幸せ……」

彼女の頬にうっすらと朱が差す。

「うん……なってみせる」

そう言って頷く彼女に、俺も無言で頷き返した。

「ああ。君の巣立つ日を、楽しみにしてるよ」

E N D